

就労を目的とする国際移動に関する研究

～危険をかえりみず米国へ不法越境するメキシコ人の動機についての考察～

小林 暁子

<研究の目的と方法>

本研究の目的は、現代世界に存在する“就労を目的とする国際的な移民現象”とそれに伴い生じている諸問題について、ミクロ的視点を持って分析することの重要性を示すためのものである。これまでの人口移動に関する研究では、人口学的あるいは経済学的アプローチから論じられるものが目立っていた。もちろん、移民というものは人口的・経済的に大きな影響を及ぼす現象であるので、マクロ的に捉えてその現象を分析することは重要である。しかし、移民を数値として捉えることのみ偏ると、感情のある人間を見失う。人間は経済学のように費用と便益を念頭に合理的な行動ばかりするわけではない。移民問題を考える時は、もっと個人とその個人が持つ背景や動機に注目し、それを個人→家族→地域→国家というように段階を踏んで分析し、傾向を把握する必要がある。

本論文では、研究のための対象地域として、就労を目的とする国際移動の数が世界一多いメキシコを選択する。メキシコが国外に送出している移民数は1,190万人であるが、その約97.5%の1,160万人はアメリカへ向かう移民である。メキシコ人のアメリカへの越境については、過去の領土問題、メキシコ人労働力を利用するアメリカの政策、メキシコの国内情勢などに大きく影響されてきた。そして現在も、アメリカを目指すメキシコ人の流れは止まることなく続いている。

また、正式に発表されている合法移民の数以上に、非合法に越境しアメリカに留まっているメキシコ人不法移民の数が膨大であり、この流入し続ける不法移民の存在は、アメリカ社会に様々な深刻な状況を生み出している。2000年～2005年の年平均の不法越境者数は85万人、2010年には30万人というように、近年における数字は減っているが¹、不法であるがゆえに正確な人数の把握は不可能であり、実際は年間100万人近くが非合法で越境しているともいわれる²。さらに、不法移民が国境越えの際に、溺死、脱水症状、日射病、国境警備隊による銃撃などで命を落とすケースが相次いでいる³ことも、見逃してはならない事実である。

メキシコは既にOECDに加盟している。このような経済規模を持つメキシコの国民が職を求めアメリカに越境するには、両国間の賃金格差、地理・歴史的な過程、アメリカ側の労働力需要、メキシコ側の余剰労働力の存在など様々な要因が関係しているが、それらの要因が“命の危険を犯してまでの越境”を決行させるまでの動機となり得るかには疑問の余地がある。彼らの危険をかえりみない越境という行為には、もっと根深いメキシコ特有の要因や社会的な矛盾が存在する可能性があるはずであり、それを解明するためには、不法越境を行うメキシコ人たち個人の背景や動機に注目する必要がある。

本研究は、先行研究の分析と、筆者が2012年にメキシコシティにて実施した非構造化インタビューの分析を、帰納法的アプローチによって行う。具体的には、22名のインタビュー対象者の共通項といえる特徴を探し出し、最終的に5つのグループに分類し、各グループのインタビュー内容の分析を行う。その上で、今後の国際移動に関する課題を提起する。

<論文の構成>

本論文の構成は以下のとおりである。

第1章 序論：研究の背景

第2章 研究の目的と方法

- 第1節 研究の目的
- 第2節 研究の方法
- 第3節 論文の構成

第3章 メキシコ人のアメリカへの移動に関する歴史的変遷と不法越境の現状

- 第1節 メキシコの概要
- 第2節 メキシコ人のアメリカへの移動に関する歴史的変遷
- 第3節 不法越境の現状と国境での死者の増加

第4章 インタビューの内容とその分析

- 第1節 グループA：“強い意志”から“偶然”まで異なる動機と背景を持つ不法越境経験者
(インタビュー：No. 1～ No. 4)
- 第2節 グループB：不法越境した家族がメキシコに戻らないまま離散状態にある者
(インタビュー：No. 5～ No. 7)
- 第3節 グループC：過去に不法越境する意志があつたが最終的に越境を選択しなかつた者
(インタビュー：No. 8～ No. 11)
- 第4節 グループD：生活に満足しているため越境しない者と越境の必要性がない富裕層
(インタビュー：No. 12～ No. 16)
- 第5節 グループE：アメリカでの就労は望まないが大学院留学は望む高等教育層の若者たち
(インタビュー：No. 17～ No. 22)

第5章 考察

- 第1節 常識化しすぎている不法越境と多様な越境動機の関連性
- 第2節 不法越境選択にメキシコ人の死生観が及ぼす影響
- 第3節 不法越境は極限の自己投資であり送金は極限の自己投資の成果である
- 第4節 “政治的・経済的に翻弄された状況による越境”から“個人の意志による越境”へ

第6章 今後の国際移動に関する課題提起

- 第1節 “人の移動”の時間軸は戻せない
- 第2節 グローバリズム下の移民受入れについて国家が持つべき自覚と力量

引用文献

参考文献

<論文の概要>

地球の歴史上、国を超えた“人の移動”は常に生じてきた。4世紀末のゲルマン人の大移動、15世紀の大航海時代に始まるヨーロッパからアメリカ大陸への入植などのように、世界史の表舞台に登場するものもあれば、一方では、記録には全く残されていないような個人レベルの移動もある。また、移動の形態も多様であり、新天地を求めた個人の意志による自発的な移動もあれば、奴隷貿易などのように個人の意志に反した強制的な移動もある。いずれにしても、規模が大であれ小であれ、形態が自発的であれ強制的であれ、長い歴史上に数々生じてきた“人の移動”の積み重なりが現代世界の形を作り出した。

我々が生きる現代においても、国を超えた“人の移動”、いわゆる「国際移動」は続いている。世界銀行によれば、2010年における国際移民は世界全体で2億1580万人であった。移民送出数が多い上位3ヶ国は、メキシコ(1,190万人)、インド(1,140万人)、ロシア(1,110万人)である。移民受入れ数が多い上位3ヶ国は、アメリカ(4,280万人)、ロシア(1,230万人)、ドイツ(1,080万人)である。また、移民数が多い上位3ルートは、メキシコ→アメリカ(1,160万人)、ロシア→ウクライナ(370万人)、ウクライナ→ロシア(360万人)である⁴。

現代の国際移動の特徴の一つは、就労を移動の主たる目的としている点にある。就労を目的とする国際移動は、送出国にとっては国内の余剰労働力を受入国の労働力需要に吸収して貰えると同時に、移民からの送金により外貨収入を得ることができるという利点を持つ。一方受入国にとっては、国内の労働力不足を格安の移民労働者で補うことができるという利点を持つ。

しかし、実際には利点ばかりでなく、移民の過度の流入が受入国に不法移民問題など様々な問題を生じさせている。それはまさに、現在のメキシコ→アメリカ、トルコ→ドイツ、アルジェリア→フランスなど就労を目的とする国際移民を多く抱える国々が直面している現実であり、現時点ではまだ有効な改善策を持ち得ていない。

S. カースルズとM. J. ミラーは、「移民はまず平和な状況の中で開始されるが、しばらく経つとその多くは様々な紛争を引き起こすようになる⁵」と述べている。当初は平和的な利益を求めていたにもかかわらず次第に弊害が生じてしまうのは、移民を受入れる動機が、“安価な労働力の確保”という目先の魅力に取りつかれた安易なものだからである。また、移民の受入れによって及ぼされる影響の大きさについて慎重に分析せずに、まるでモノを輸入するかのように場当たりに人を受入れてしまうからである。そもそも、移民現象の根本を理解できていない……つまり、移民は“モノの移動”ではなく“人の移動”であることの視点に気づいていないのである。

移民は流動的・継続的なものである。しかし政府は、その時の国家の経済状況にとりあえず見合いそうな場当たりのな移民政策をとりがちである。その政策の結果、将来的にどのような移民の流れが作り出されるか、また、その流れはいつまで継続するものなのか、などを現実的に深く考えることなしに……。そのため、いざ問題が生じた時には手が付けられない状態にあることが多い。本論文で扱うメキシコ→アメリカに関して、多くのメキシコ人がアメリカへ不法越境するのには、両国間に生じてきた歴史上の様々な出来事が背景にあるが、特に、経済状況に左右されながら実行されてきたアメリカ側の政策による影響が大きい。絡み合った数々の事実の連鎖が、流動的・継続的なメキシコ人移民を作り出し、問題を複雑化し、一朝一夕で解決できない現状となっている。

このような国家と国家の関係性における移民問題の複雑さに加え、移民個人にも焦点を当てると、よりミクロな動機や背景が浮かび上がってくる。それらは、筆者が行った22名のメキシコ人へのインタビューの中にも確認することができる。人の数だけ異なる人生があり、人の動き方は、各個人の考え、偶然、不可抗力などによって様々ではないことを垣間見ることができる。さらに、不法越境がメキシコにおいて常識化している事実や、越境決断に際しメキシコ人の死生観が及ぼす影響などについても同インタビューの分析を基に考察し得る。

就労を目的とする国際移動は、グローバル化によって今後さらに広汎化・複雑化していくだろう。というのは、

各国が自国経済と社会を存続させるための一つ的手段として移民の受入れを行うことはあり得ない選択ではないからだ。そうすると、各国政府は、長期的展望を持って、より慎重に移民政策に携わっていく必要がある。

今後、移民を国家の労働力として受入れようとしている国々にとっても、いずれメキシコ→アメリカのような問題を抱える恐れは十分にある。しかし、いざ問題が起こっても、現時点では移民問題に対処するための決まった処方箋はないし、処方箋が存在するかも定かではない。しかし、移民受入れにはいずれ問題が起こり得るといふリスクの存在を自覚することで、問題を軽減できる可能性はあるはずだ。

受入国の都合によって移民を労働力としてその場しのぎで利用することには、メリットだけでなくリスクと責任も伴う。考えられ得るリスクとは、最終的に国の人口動態をコントロールできなくなるというリスク、また、移民と自国民の間に軋轢や衝突が生じるというリスクだ。責任とは、移民と自国民の両者の人生を、経済的にも社会的にも国が背負っていかざるをえないという責任である。そして、そのリスクや責任は、当該世代だけではなく、子や孫の代に至るまでの人生を左右する可能性もはらんでいる。

したがって、もし今後、実際に自国経済のために移民を労働力として利用することを政策として推し進めたいのであれば、政府は以下の2点を自覚することが不可欠である。

- ① コスモポリタニズムの視点で移民の受入れを捉えることができるような価値観を国民に普遍化させる努力が必要である。
- ② 移民を政策として受入れるという行為は、「数値としての人」を動かす行為」と、「感情を持った生物としての人」を動かす行為」を同時に行う複雑で困難な行為であり相当の力量を必要とする。

各個人が自分の立つ場所からの主張だけをしていても、軋轢や衝突だけしか生まれない。重要なのは、その時にどれだけ中庸の妥協策を見いだせるか、それを受入れ合えるかということである。そして今後、世界における国際移動という現象が、より多くの人々にとって良い方向に進むか否かは、各国家が、「移民現象に対する洞察力」と「移民と国民を対立させない中庸の土壌を作るための力量」をどれだけ持ち得るかにかかっている。

¹ 国本伊代編著 (2011) 『現代メキシコを知るための60章』明石書店 p. 159

² Wikipedia:メキシコ=アメリカ国境

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%EF%BC%9D%E3%83%A1%E3%82%AD%E3%82%B7%E3%82%B3%E5%9B%BD%E5%A2%83> (2013. 1. 19)

³ La Prensa, Jan. 4. 2012: “Creció el número de muertos al cruzar la frontera”

<http://www.oem.com.mx/laprensa/notas/n2371601.htm> (2013. 1. 19)

⁴ The World Bank (2011) *Migration and Remittances Factbook 2011 Second Edition*, Washington DC p. 1, p. 3, p. 5

⁵ カースルズ, S. ・ミラー, M. J. (2011) 関根政美・関根薫 (訳) 『国際移民の時代[第4版]』名古屋大学出版会 p. 267